P－13

同一口腔内の根未完成歯下顎両側第二小臼歯にアペキソゲネーシス法並びにアペキシフィケーション法を用いた症例の長期X線的観察

○樋口　学、宮﨑修一、金澤政広、石川博文
瀬尾令士
瀬尾歯科クリニック、熊本B.P.C.小児歯科研究会

根未完成な幼若永久歯の歯髄処置に臨む場合、術式によって根尖部の治癒形態が大きく左右されることは周知の通りである。 今回、同一口腔内の根未完成な幼若永久歯下顎両側第二小臼歯の中心結節の破折により歯髄炎を惹起したもの、更に急性根尖性歯周組織炎を招来した症例に遭遇した。

処置に際して、臨床的所見、X線的検査所見、プラディアテスト結果などから術式を選択して施術後、長期のX線的且つ臨床的な経過観察を行った結果、興味ある知見を得たので報告する。

（症例）

患者：10歳8ヶ月、女児
初診：平成10年12月7日
主訴：下顎両側第二小臼歯の冷温痛及び咬合痛
既往歴及び家族歴：特記事項なし
臨床診断：下顎右側第二小臼歯の急性根尖性歯周組織炎の疑い
下顎左側第二小臼歯の急性漿液性歯髄炎の疑い
現病歴：某歯科医院にて矯正治療経過中に下顎両側第二小臼歯に疼痛を覚え、歯内治療を目的に某歯科医院より紹介依頼を受けた

（現症）

全身所見：体格、栄養状態は良好
口腔内所見：下顎両側第二小臼歯の中心結節部の破折を認める
冷温痛及び打診痛を認める
下顎右側第二小臼歯の遠心側根尖部に瘻孔を形成し排膿を認めた

（処置並びに経過）

臨床的所見、X線検査所見（病巣把握、根の発育段階）及びプラディアテスト結果などを参考として術式且つ使用薬剤（暫間根充剤）を選択して施術した。 下顎左側第二小臼歯には部分的高位抜髄法によるアペキソゲネーシス法を施し薬剤としてカルシペックスを用いた。 また下顎右側第二小臼歯にはビタペックス剤を用いてアペキシフィケーション法を施した。 その後、病巣の治癒と根の形成（アピカルストップ）を確認後、ガッタパーチャーポイントによる永久根充並びに修復を施して治療を終了した。 現在まで予後良好である。

P－14

小児の習慣性頬粘膜咬傷の一症例

○小笠原榮希、高田圭介、尾崎正雄、本川　渉
福岡歯科大学　成長発達歯学講座
成育小児歯科学分野

自己咬傷は、Lesch-Nyhan症候群、Gilles de la Tourette症候群、先天性無痛無汗症などの全身疾患や知能障害を有する患者におけるものと、精神緊張や欲求不満から発現する心因性のものが報告されている。今回、我々は6歳5か月の男児に習慣性頬粘膜咬傷を認めた症例を経験し、15歳まで経過を観察したので報告する。

患　児：6歳5か月、男児
初診日：平成4年12月18日
主　訴：右側臼歯部の疼痛
家族歴：父母、2歳年上の兄、患児の4人。母はパートにでることが多い。
既往歴：難聴のため、福岡市立子供病院耳鼻科に通院。喘息、アレルギー性鼻炎あり。4歳頃、某歯科医院で齲蝕治療の経験、5歳頃より歯ぎしり。
現病歴：1週間前より、右側臼歯部の疼痛を訴えたため、抗生剤、鎮痛剤を服用するも緩解せず、平成4年12月18日当科に来院。
現　症：口腔外所見；右側耳下腺咬筋部の圧痛、右側顎下リンパ節の腫脹、硬結、軽度の圧痛を認めた。
口腔内所見：Hellmanの歯牙年齢はⅢA。上顎右側第一、第二乳臼歯はセメント充填が崩壊しており、動揺および圧痛を認めた。また右側臼歯部頬粘膜に淡黄色の偽膜におおわれた潰瘍があり、同部の圧痛、硬結、腫脹が観察された。
治療ならびに経過：当初から咬傷の可能性が考えられたが、炎症性あるいは腫瘍性病変の疑いもあり、対症療法を行いつつ観察するも著変はなかった。初診より、約1か月後、母親から、就寝時に自分で頬粘膜を咬んでいるらしいとの申し出があり、さらに口腔外科に診断を仰ぎ、咬傷と判断した。咬傷に至った原因は、特定できなかったが、咬傷防止にはFKOが効果的であった。その後も、季節の変わり目等に咬傷を再発したが、年齢が上がるにつれ、徐々に軽度となり、現在に至っている。